

### 戦前の那賀川改修工事

大正元年及び大正7年の洪水を契機として、那賀川の改修を望む沿岸住民が猛運動した結果、国により那賀川改修の必要性が認められ、大正10年頃から調査測量が開始されました。大正14年には那賀川改修工事計画がまとまり、那賀川本川の羽ノ浦町及び大野村から海に至る約12km間、支川桑野川の長生・宝田村から派川岡川の合流点に至る約5km間、派川岡川の柳島・宝田村から海に至る約6km間が直轄改修事業の対象となりました。計画高水流量は、那賀川本川では大正7年洪水の流量をもとに古庄で8,500 m<sup>3</sup>/s、桑野川では大正元年洪水の流量をもとに大原で700 m<sup>3</sup>/sと定められました。

この流量を安全に流下させるため、那賀川本川では左右岸で在来堤防の拡築と補強、さらに一部区間では大幅な引堤により河道を広げることとし、桑野川では新堤の築造、派川岡川では旧堤の拡築及び大幅な引堤を行うこととしました。また、那賀川の大洪水の一部を派川岡川へ越流させるガマン堰を完全に締切るとともに、富岡水門を建設して、那賀川と派川岡川、桑野川を完全に分流することとしました。さらに、河口部で洪水流下の障害となっていた三角州の斉藤島を撤去し、河道の断面積を確保することとしました。

那賀川の直轄改修工事は昭和4年度から昭和19年度までの予定で開始されました。本格的な改修工事は昭和7年度から着手され、昭和9年9月の室戸台風や昭和10年8月の台風などで被害を受けながらも、那賀川本川の左右岸の改修工事が進められました。昭和14年には右岸の南島付近の引堤のために那賀川橋の継ぎ足し工事が必要となり、那賀川橋は101m継ぎ足され橋長336.82mの橋梁として昭和17年3月に完成しました。河口部では斉藤島の撤去が昭和12年度～14年度に行われました。斉藤島は、現在の本川河口部のほぼ中央に浮かんでいた島で、上下流方向に約1km、最下流端で幅約350mの長三角形で、人家が10戸ほどありました。この撤去にはディーゼル機関車が導入され、掘削土砂は横見・芥原堤防の築堤材料として運ばれ、流用されました。

ガマン堰の締切りは昭和17年度～18年度に行われました。ガマン堰は、明治2年に那賀川南岸の下大野から派川岡川への分派口につくられた石積の堰で、洪水時には洪水量の3分の1だけを岡川に流入させる越流堰でした。ガマン堰が締め切られたことにより、あとは本川と派川岡川を分離するための富岡水門が完成すれば、派川岡川は本川と別系統の、桑野川の一支出となるはずでした。富岡水門は昭和16年に着工されましたが、昭和18年頃には戦争激化に伴う事業費削減などにより、工事は一時中断されました。このため、当初計画で目標としていた昭和19年度には、本川築堤は概成したものの、支川桑野川、派川岡川の改修はほとんど着工されるに至りませんでした。富岡水門の工事は昭和25年に再開され、昭和27年に完成して、これにより本川と支川が完全に分離されることになりました。

<参考文献：建設省四国地方建設局徳島工事事務所編「那賀川改修史」1981年、国土交通省四国地方整備局・徳島県編「那賀川水系河川整備計画【変更】」2015年など>



上流から富岡水門をのぞむ  
左是那賀川、右は桑野川